

山下 徹氏

NTT データ 取締役社長

#137



紹介者



門脇 英晴氏
日本総合研究所 特別顧問

最近、働く人のワークライフバランスが注目されています。当社でもテレワークによる在宅勤務で、ワークとライフの両立を図る社員が増えてきました。家族との時間を増やしたり、地域活動に参加したり、また、職場を離れて仕事をするなどで、かえって集中できたり、思わぬアイデアが浮かぶなど、ワークへの好影響もあるそうです。

私は、これからの知識社会での働き方では、この在宅勤務の例のように、バランスを取りながら融合させるといふ部分に本質があると思います。知識はネットワーク上を流通します。インターネットでは、オープンソースフトを開発する知的コミュニティのように、多数の人の知恵や努力を集積して成果にすることができるようになります。

当社の社内SNS上には、社員が相互に質問し回答するQ&Aがあります。Q&Aは、知識創造という観点において象徴的で、質問しても答えても、場に知見が一つ貯まり、質問者・回答者双方のポテンシャルが上がります。そして知識は、場に出て検証し活用されることで成果を生みます。今まで企業内で成果とは、自力で獲得する世界でしたが、知識社会では知的コミュニティを通して、他者、他組織の成果に貢献し、全体の成果を大きくできます。自分の仕事とのバランスを取りながら、他者の仕事にも貢献できるのです。私は、そうした相互の貢献活動を高く評価したいと考えています。

これを個人評価にどう繋げるかは課題ですが、当社では、従来の能力・業績の評価軸に、地域・職域・知域への貢献度を加える、「貢献主義」の導入を進めています。地域は社会貢献、職域は組織への貢献、知域は社会的知財への貢献です。

知識社会と貢献主義

これからは、企業が得た利益だけで社会貢献するのではなく、社員も一市民として社会貢献することが必要でしょうし、またそうした人材が、企業や社会の資産になっていくのだと思います。企業は社会から、人という大切なリソースを借りて事業を行っています。能力をしっかりと引き出していく義務を、私たちは負っています。働いている人の能力や人間性は耕され向上したか。彼らの知識は活用されているか。知識社会において人的資産を豊かにするために「貢献」という考え方がキーになるのではないのでしょうか。

次回

横尾 敬介氏

みずほ証券 取締役社長

にご登場いただきます。